

日本英語教育史学会 会報

325

2025 年 2 月 15 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiselt.org

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト <https://hiselt.org/>

第301回研究例会報告

2025 (令和 7) 年 1 月 11 日 (土), 第 301 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 16 名でした。

例会では 2 つの研究発表が行われました。最初の研究発表では、二五義博氏 (山口学芸大学) が「戦前の中学校英語教科書における教科横断的要素について (3)」というタイトルでお話しされました。続いての研究発表は、孫工季也氏 (金沢学院大学) が「どのようにして英検協会による高校教育への関与が正当化されていったのか? (1963-2000)」というタイトルで発表を行いました。司会は上野舞斗氏 (四天王寺大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は二五氏, ②は孫工氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

<発表 1 の感想>

◆戦前だから何か古臭いことをやっているのかなと思ったが実は逆で、今の教育現場のクオリティを上げるのにも当時行われていたクリルが役立つということがわかった。(岩橋一樹)

◆この分野ではわたくしは全くの素人でしたので、学ぶことが多く大変刺激的なご発表でした。CLIL という用語ももちろん初めて知る用語で大変興味を持ちました。日本の英語教科書全体を真の意味で (受信も大切にしつつ) 発信型を目指す意味で、私が個人的に長期間考えてきたことがまさにこの CLIL の手法でしたので驚いております。いつの日か機会があれば日本の英語教科書をこのような内容にすることに携わってみたいと思った次第です。本日は本当にありがとうございました。(源邦彦)

◆一連のご発表、いつも興味深く伺っております。英語教科書の内容分析という点では相当の研究蓄積をお持ちだと思いますので、今後はたとえば、他教科の教科書との比較 (題材内容の関係性) も視野に入れられてはいかがでしょうか。また、研究の再現性という観点から、研究対象の選定理由等の方法論的側面について固められる必要があろうかと存じます。ありがとうございました。(maitri)

<発表 2 の感想>

◆試験問題の内容や形式が受験者のボリュームゾーンとなる中学生や高校生の年齢に合わせたものであるという点が受験者数の増加とどうかかわってくるのかということフロアの人と孫工さんとお話しできればもっと良いと思った。TOEIC のようなビジネス関係の話題や TOEFL のア

カデミックな話題と違って中学生や高校生の日常生活に関係した試験内容であるので、高校教育への関与が現場の先生方に正当化された可能性があることも今後孫工さんの発表で取り上げていただければと思います。さらに、一日に複数の級の試験を受けられるようになったことが受験者数の増加や受験者の意識の変化にどうかかわってきたのかといったことも過去に受験したことのある人の目線でフロアの人も孫工さんにお話できるともっと良いと思った。(岩橋一樹)

◆全国大会に次ぐ、英検の歴史に関する発表を興味深く伺いました。資料蒐集・精査、計量作業など地を這うような作業の甲斐が着実に結実していることを目の当たりにしました。発表者自身も今後の課題として挙げておられますが、当時の受験者や関係教員でないとわからない、つまり誌面には残らない「生の声」もあろうかと思われます。研究のさらなるご発展お祈りしております。(maitri)

<会全体に対する感想>

◆内容が充実していて上野さんがいつも円滑に進行してくださるので、非会員であるがまた次の研究会にも参加したいといつも思います (岩橋一樹)

発表を終えて

二五 義博 (山口学芸大学)

日本英語教育史学会には 4～5 年前に入会し、全国大会の方では何回も発表しておりましたが、例会での発表は今回がちょうど 1 年前に続いて 2 回目となりました。短い時間の全国大会では、一般論にとどまることが多かったのですが、例会の発表時間は長いこともあり、一つひとつの事例についても詳細にお話することができました。まずは、このような素晴らしい機会を与えて下さり感謝申し上げます。

私は CLIL を 10 数年にわたって研究してきましたが、本学会においては、まず、明治時代～昭和初期の小学校用国定英語教科書を主要な分析対象とし、次に、1 年半前からは中学校の英語教科書にも範囲を広げ、両者ともに現代の教科書に見劣りしないほど教科横断的であったことを示してきました。今回は中学校の第 3 弾の事例研究として、「戦前の中学校英語教科書における教科横断的要素について (3)」というテーマで発表した次第です。本発表では、新しく New start readers 等の教科書を用いて、理科や社会の分野の諸問題に対して、英語で自ら意見が表現できる力を育成する CLIL の「思考」面にも焦点を当てました。

今後の課題としては、さらに多くの中学校英語教科書や他校種の CLIL の事例を積み上げていくことと、実際に教科書を使ってどのような授業がなされていたのかを可能ならば探ることです。後者については当時の学習指導案等が残っていなければ証明することは難しく、現在、資料探しに奮闘しているところです。私は今回いただいた多くの貴重なご教示を踏まえつつ、明治時代～戦前の CLIL 研究を継続していきたいと考えています。

発表を終えて

孫工 季也 (金沢学院大学)

発表に対し、貴重な指摘や助言をいただいたことに深く感謝する。特に、当時の教師がどのようにして生徒に英検を受けさせるようになったのかについて、これから考察を深めていきたい。

「発表者は学校教育の中で英検を受けさせることについてどのように考えているか？」という質問に十分に答えられなかったことが心残りである。この場を借りて、改めて考えを述べたい。

この問いは「英検は学校教育の学びに整合するか？」や「英検は英語力を正確に測る試験になっているか？」と関連して問われることが多い。この二つの問いの答えを基に、学校教育の中で英検を受けさせることへの是非が決まる、という流れである。

私はこの流れ自体に引っ掛かりを覚えている。というのも、人は単一の意図や動機（ここでは「整合性や妥当性がある／ない」）だけに基づいて行為する（英検を受ける（ない）／させる（ない））わけではない、と考えるからである。さらに、行為の背景には個々人の意図や動機だけでは説明しきれない、時代の流れもあると思っている。質疑応答の際は咄嗟に当たり障りのない返答をしてしまったが、「発表者は学校教育の中で英検を受けさせることについてどのように考えているか？」という問いに対する現時点での私の答えは、「まだわからない」である。

不十分な回答だとは思いますが、今の私の目の前にあるのは、過去のある時点で学校教育の中で英検が広まっていったという現象のみである。その現象が生まれた背景には、整合性や妥当性以外の観点から英検を捉えた人々の意図や動機があったのかもしれない。また、時代の流れに規定された人々がそこに関わっていたのかもしれない。まずは、その多層で多様な姿を解き明かしたいと考える。その上で、「発表者は学校教育の中で英検を受けさせることについてどのように考えているか？」という問いに、正面から答えたいと思っている。

日本英語教育史学会第41回全国大会（神奈川大会）のご案内

第41回全国大会を下記の通り開催いたします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

期 日：2025 年 5 月 17 日（土）・18 日（日）

形 態：ハイフレックス （※）記念企画は対面のみ。

会 場：【対面】神奈川大学 横浜キャンパス（横浜市）

【オンライン】Zoom

1日目には、50年の節目を迎える「英語教育大論争」（平泉・渡辺論争）をテーマにした企画（対面限定）を予定しております。また、1日目、2日目には、研究発表も行われます。

記念企画：「英語教育大論争（平泉・渡部論争）から50年」（仮）

登壇者： 寺村繁氏（元ELEC教育部長、元ELEC評議員）

江利川春雄氏（和歌山大学名誉教授）

（コーディネーター：久保野雅史氏（神奈川大学））

◆研究発表について

- ・大会での研究発表を募集いたします。発表希望者は **3月12日（水）** までに以下のフォームからお申込みください。全国大会では積極的な採択が行われますので、どうぞ奮ってご応募ください。

研究発表応募フォーム：<https://forms.gle/kBzayhD2eJJy11aZ9>

- ・研究発表をされる方は現地会場での参加（対面参加）をお願いいたします。発表者入替え・質疑応答を含めて、発表時間は 30 分（発表 20 分、質疑応答 5 分目安）です。

- ・研究発表をお申込みの方には、ご発表の内容を 1,000 字程度にまとめた要旨の作成をお願いいたします (**4月11日 (金) 17:00必着**)。

◆大会へのご参加について

- ・大会参加のお申込みは、研究例会と同様、学会ウェブサイトから受け付けます。
- ・オンラインでのご参加をお申込みいただいた皆様には、Zoom ミーティングの ID とパスコードを通知いたします。ただし、記念企画については対面限定であること、オンライン配信は簡易的なものであることをあらかじめご了承ください。
- ・大会参加費：会員・学生 無料 非会員 1,000 円
- ・大会参加申込み用フォームの URL を含む詳細につきましては、メール、および、次号会報にてお知らせいたします。
- ・大会プログラムにつきましては、次号の会報をお待ちください。

◆お問い合わせ先

- ・ご不明な点がありましたら、大会実行委員会 (taikai@hiselt.org) までご連絡ください。

>> 事務局より

>> 第 4 回理事会を開催

1 月 11 日 (土) 12 時より 13 時 30 分まで、2024 年度第 4 回理事会がオンラインで開催され、以下の件が話し合われました。

(1) 第 41 回全国大会について

本年 5 月に神奈川大学横浜キャンパスでの開催を予定している第 41 回全国大会について、久保野実行委員長・上野担当理事より報告を受け、その概要を固めました。全国大会の詳細は 3～4 ページをご覧ください。

(2) 『日本英語教育史研究』投稿規程について

紀要の投稿規程について、「研究ノート」を再定義するとともに審査のプロセスをさらに明確にする方向で見直しを進めています。本理事会では惟任編集委員長より提示された原案に基づいて検討し、次回の理事会で最終決定することとしました。詳細は 5 月の会員総会に報告します。

(3) 2024 年度会計の中間まとめについて

会計担当 (河村) よりメモを示し、収支の状況を報告しました。今年度は、例年に比べ多くの会員のみなさんから会費をお納めいただいています。最終的なまとめは次回の理事会に報告する予定です。

(4) サーバ管理会社の変更について

昨年末より閲覧不能となっていた学会公式ウェブサイトを再構築し、送受信不能となっていた電子メールを復旧するため、新たなサーバ管理会社と契約することを決めました。具体的な作業については上野理事の手を煩わすこととしました。

(5) 『日本英語教育史事典』(仮称) について

懸案となっている出版物について、田邊会長より『日本英語教育学者人名辞典』(仮) もしくは『日本英語教育史研究事典』(仮) として素案が提示されました。学会創立 50 周年を目処に出版することとし、今後検討を重ねます。

(6) 2025 年 3 月の研究例会について

久しぶりに対面での開催を決めている第 302 回研究例会について、熊谷担当幹事のメモに基づき吉村幹事より報告を受けました。研究例会の詳細は 7～8 ページをご覧ください。

(文責：事務局長)

)) 会費納入について (お礼とお願い)

年会費 一般：5,000 円／学生：3,000 円 (学生会員は初年度に限り無料となります)

送金先 【1】 ①郵便局で払込取扱票をご利用の場合

②ゆうちょ銀行の総合口座よりご送金の場合

→ゆうちょ銀行 [振替口座] 00150-3-132873

【2】 ゆうちょ銀行を除く金融機関の口座よりご送金の場合

→ゆうちょ銀行〇一九 (ゼロイチキョウ) 店 [当座口座] 0132873

本会の会計年度は 4 月より翌年の 3 月までとなっております。理事会報告にもあります通り、今年度はすでに多くのみなさまより会費をお納めいただいております。この場をお借りしてお礼申し上げます。

昨年末、未納のみなさまにお尋ねとお願いのメールを差し上げましたところ、早々に多くのみなさまにご対応いただきましたこと、心より感謝申し上げます。ご送金にお応えし早急に過年度分の紀要をお送りすべきところ、事務作業が遅滞しておりますことをお詫び申し上げます。

)) 新しいウェブサイト・メールアドレスについて

事務局から 1 月 21 日に一斉メールでお知らせした通り、昨年 12 月初旬より会の公式ウェブサイトが閲覧できずメールの送受信もできない状態になっておりました。原因について情報を収集したところ管理会社の都合によりサーバが止まっているものと推定され、復旧の目途も立たないことから、理事会で検討し新たなサーバ管理会社と契約することといたしました。

ウェブサイトは 1 月 16 日より新しいものとなっておりますので、あらためてここにお知らせいたします。ゼロからの再出発を余儀なくされたため時間的な制約から調整中の部分も残していますが、徐々に充実させてまいりますのでよろしくご活用 of のほどをお願い申し上げます。

学会公式ウェブサイト <https://hiselt.org/>

新しいメールサーバの運用にともない、事務局および各担当のメールアドレスも以下の通り変更しております。

事務局 membership@hiselt.org

紀要担当 kiyo@hiselt.org

会報担当 newsletter@hiselt.org

大会担当 taikai@hiselt.org

例会担当 reikai@hiselt.org

なお、事務局の Gmail アドレス (membership.hiselt@gmail.com) も、特にメールを差し上げる際には引き続き使用しております。どうぞご承知おきください。

1 か月にわたりご迷惑をおかけいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます。ブックマークの変更やアドレス帳の修正などでお手を煩わせますこととなりますが、なにとぞご寛恕のほどをお願い申し上げます。

【ご注意ください】日本英語教育史学会の名を騙る電話について

日本英語教育史学会もしくは同事務局の名を騙る電話がかけられていたことが、会員の方からのご連絡により発覚しました。

1 月 17 日(金)の昼頃に市外局番 03 から架電されたもので、当該の会員の方はご不在であったことから、(1)学会費 (年会費) の件で電話した、(2)学会のアドレスまでメールを送ってくれ、との内容が留守番電話に残されたとのことです。幸い会員の方は詐欺等の被害に遭われてはいませんが、留守番電話ではなくやり取りをされていたとしたら、個人情報を聞き出すなり送金を指示するなりが行われていたかもしれません。

会もしくは事務局を名乗ってそれらの行為に及ぶ者がおり、それによって会員のみなさまが被害に遭われたとすれば、みなさまと会・事務局との信頼関係を大きく損なうこととなってしまいます。

事務局の基本的な方針として、

◎ 会費に関することを電話で問い合わせたり連絡したりすることはありません。

◎ 個人情報を電話で収集したり確認したりすることはありません。

これらのことをする際には、郵便もしくは電子メールを用いることとしております。金銭や個人情報に関することがたいへん微妙なものを含むことはご案内の通りです。電話でのやり取りは、ご不快な思いをおかけするばかりでなく、時に誤解を生じさせ、結果として会の信用を失うことに繋がりがかねないと考えております。わたくしが事務局をお預かりして以来、この方針は一貫しておりますし、今後も変わることはありません。

今後、日本英語教育史学会もしくは同事務局を名乗る電話があった場合には、けっして相手になさることなく、しかるべくご対応くださるようお願い申し上げます。あわせて、そのような電話をお受けになった際には、お手を煩わせ恐縮ですが、架電の日時・通話の内容・(着信履歴が残っている場合には) 先方の電話番号等を事務局までお知らせいただければ幸いに存じます。

なんと物騒な世の中になってしまいましたが、どうぞくれぐれもご用心くださいますようお願い申し上げます。

事務局長 河村和也

【公示】次期会長の選挙について

一昨年の全国大会で選出された田邊会長は、本年 5 月をもって任期満了となります。次期会長については第 41 回全国大会の際に開催される会員総会において互選しますが、それに先立ち、事務局内に選挙管理委員会を置き立候補を受け付けます。立候補者は、3 月 14 日 (金) までに任意の書式をもって郵便、信書便もしくは電子メールで選挙管理委員会までお届けください。

*** 立候補の届け先**

郵便・信書便の場合：〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562 番地 県立広島大学

河村和也研究室気付 日本英語教育史学会選挙管理委員会

電子メールの場合： membership@hiselt.org (メールアドレスが新しくなっています)

>> この先の研究例会・全国大会

◆ 第 302 回研究例会 2025 年 3 月 15 日 (土) 専修大学サテライトキャンパス

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (9 月発表希望であれば 6 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

>> 新入会員

◆ 源 邦彦 (みなもと くにひこ) 神奈川県 神奈川大学

>> 英語教育史フォルダ

江利川春雄名誉会長が、日本語教育史研究会の記念シンポジウム「日本語教育史研究の問題提起と将来展望—設立 30 年の先へ—」に登壇されます。

日時：2025 年 3 月 22 日 (土) 13:00～17:00

開催形態：オンライン (Zoom)

参加費：無料

参加希望者は日本語教育史研究会のウェブサイト (<https://nihongo2020.wixsite.com/nihongo>) にアクセスし 3 月 19 日 (水) までにお申し込みください。シンポジウムの詳細もこちらでご確認いただけます。

日本英語教育史学会 第 302 回 研究例会

日 時：2025 年 3 月 15 日 (土) 14:00～17:00

専修大学サテライトキャンパス (対面開催)

〒214-0014 神奈川県川崎市多摩区登戸 2130-2 アトラスタワー向ヶ丘遊園 2 階

研究発表

「台湾と日本の英語教科書の繋がりとは分岐点—文学教材とその指導を中心に」

平井 清子 (北里大学)

台湾と日本の英語教育は、1950 年代からほぼ同じ教授法の流れを汲み、1980 年代、1990 年代とコミュニケーション重視へと移行している。しかし、文学教材の扱いには違いが生じた。一方、台湾の 1980～1990 年代の高校英語教科書には、日本の 1970 年代の高校英語教科書「本文」からの文学教材の改編・抜粋が複数見られ、共通の文学教材も扱われたが、練習問題等は独自に編纂された。本発表では、台湾と日本の英語教科書の繋がりとは分岐点、そして、交わらなかったものも含めて明らかにすることを試みたい。

自著を語る

「春水と英語」

発表者：森悟 (本学会会員)

指定討論者：吉村和也 (和洋女子大学大学院生)

佐川春水は英語の達人であった。特に指導技術において右に出る者はいなかった。戦前は正則英語学校や日進英語学校で活躍し、その見事な講義は一世を風靡した。しかし、戦争が春水の人生を狂わせてしまう。失意のまま故郷・松江に戻った春水を蘇生させたのは英語であった。島根大学が講師として迎えたのである。爾来 8 年間、春水は後世に残る講義を展開していく。今回は、そんな春水と英語の関わりについて述べてみたい。

参加費： 無料

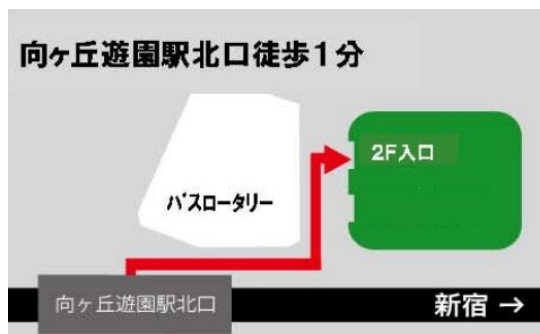
問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiselt.org)

【会場案内】

「専修大学サテライトキャンパス
交通アクセスご案内」より

(<https://www.senshu-u.ac.jp/social/satellite/>)

- ◆小田急線向ヶ丘遊園駅北口下車 (新宿から急行で約 20 分)
- ◆東急田園都市線・横浜市営地下鉄あざみ野駅より向ヶ丘遊園駅行バスで約 45 分、終点下車



EDITOR'S BOX 3 月の例会が対面開催になったことで、久しぶりに【会場案内】を作成しました。／今年は寒波や大雪に関する報道が続いており、ご心配いただくことが多いのですが、秋田市に関しては実はあまり被害がありません。一方、熊の出没は冬になった今でも続いています。この事態は昨年までの秋田では考えられなかったことで、同僚の中には通勤手段を徒歩から車に変えた人もいます。「共生」ができれば理想的ですが、現実には厳しいです……。 (若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 newsletter@hiselt.org)